




論文審査結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第175号	氏名	金野 太亮
論文審査担当者	主 査	教授	丹野 孝一 
	副 査	教授	内田 龍児 
	副 査	教授	佐々木健郎 
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>本論文は、タデ藍 (<i>Persicaria tinctoria</i>) 含有のアルカロイドであるインジルビンの2型糖尿病におけるインスリン抵抗性改善作用、及びトリプタンスリンの潰瘍性大腸炎における抗炎症作用の作用機序について、両アルカロイドが強いPPARγリガンド活性を示したことを軸に、その作用機序と新規治療薬になり得る可能性について述べている。これらの内容は2報の学術論文として発表されている。</p> <p>第1章では、インジルビンがロシグリタゾンより強いPPARγリガンド活性を示したことから、3T3-L1脂肪前駆細胞株を用いて、インジルビンが脂肪前駆細胞から成熟脂肪細胞への分化誘導作用、及びアディポネクチン、エストロゲン分泌量、GLUT4の発現量の増加に起因する細胞内糖消費量を増加させインスリン抵抗性の改善作用を示すことを明らかにしている。</p> <p>第2章では、ヒト結腸上皮細胞HT-29細胞株におけるTNF-α誘導炎症モデルを用いて、トリプタンスリンがICAM-1の発現、及び調節に影響を与えることなく、その強いPPARγリガンド活性に起因するCOX-2発現量の抑制を介して抗炎症作用を示すことを明らかにしている。これらの知見は伝統医薬の作用機序の解明と天然物に由来する新薬のシーズの発見の観点から極めて興味深い。</p> <p>以上、本論文は薬学における生薬学と医療薬学の領域に多くの新しい知見をもたらしており、博士の学位論文としてふさわしいと判断した。</p>			